

トウンリリミス寓話  
「魔女と王さま」  
(後編2)



2022/12/22



エリー





# 目次

本文 .....	1
----------	---



# 本文

## 01 作戦会議

「つまり蒸留水はどう清浄にするかが鍵なわけ。すべての作業はそこに集約される。お分かり？」

説明を終えたニニーがイイギリとウツギの反応を待つ。

同意するようにイイギリがうなづく。

首をひねりウツギが問い返す。

「魚は食えるからきれいじゃないか。なんで混じってたらダメなんだ？」

ニニーはびっくりしてしまう。

「え！？　そこ？　疑問に思う？」

感覚としてはノーと分かるが、いざ説明を求められると理由が語れない。

「えーと、もし小魚が紛れた水をろ過装置に入れて魚が死んだら腐るわよね？　そしたらきれいにするためのろ過装置で水がよごれるわよね？」

ウツギがよーく考えて答える。

「つまり魚をろ過装置で死なないように生かせばいいのか？」

間髪いれずにニニーが否定する。

「違う！　そもそもいれちゃダメなの！　だから湧き立ての水を山奥まで汲みに行くの！」

おずおずとイイギリが口を挟む。

「ニニーはほうきで空をカッ飛ばせば片道5分とかからないが、僕たちが徒歩で行ったら片道1時間はかかるよ」

人に頼むのって何て難しいんだろうとニニーは思う。

「じゃあ……水はわたしが汲んで、ウツギがろ過、イイギリが蒸留にする？」

イイギリが首を横に振る。

「これから部下がもっと増えて、ニニーは管理や進行、交渉などの仕事をするから水汲みは僕らがしないと」

魔女は実技より経営や管理の仕事が多いため、イイギリの言うとおり。だから試験に落ちたのかと改めて思う。

黙っていたウツギが口を開く。

「エンジュさんはどうしてるんだろう？」

ハッとしたようにイイギリも続く。  
「水汲みをどうしてるか聞いたらいんじゃない？」  
人に聞くなど絶対に嫌だ。自尊心が傷つけられる。そもそも教えてくれないだろう。  
でも……。

## 02 助言

初めてエンジュの実験室を尋ねたニニーは、扉の前で立ち尽くしていた。  
誰もいないのか、シーンとしている。  
思いきって開けようとした時、後ろから足音がした。  
振り返るとエンジュとキリとクコがバケツに2杯ずつ水を汲んで近づいてきた。  
「それは蒸留水に使う水なのかしら？」  
ニニーが勢いで声をかけた。  
「再試験で困ってるのかい？」  
凶星を突かれてニニーは困惑する。  
(ここで逃げたら負けよ！)  
覚悟を決めて話し出した。  
「わたしは山奥の湧水を汲んでいたのだけでも、部下たちには遠すぎる。エンジュたちはどこで汲んでくるの？」  
沈黙が流れる。  
やはり敵に教えるわけない。わたしがバカだった。帰ろうとしたその時、エンジュが後ろから声をかけた。  
「すぐそばの川だよ」  
バケツを覗き込むと小魚が泳ぎ、藻が浮いていた。  
「生き物が入ったらろ過装置がよごれない？」  
エンジュとクコとキリが同時にぷっと吹き出す。  
「きれいな布でこしてからろ過する」  
納得行かないニニーは再び問いかける。  
「生き物がいた水は清浄ではないでしょ？」  
「清さを好む小魚が住める水はきれいだよ」  
「でも……」  
部屋に入っていく3人を見送るニニー。  
「突き詰めて完璧目指しても量はつくれない。最低限の品質で量産するのが試験の課題じゃない。見ていけば？」  
部下に頼らなかつただけではなく、根本から間違っていたことを理解したニニーは素直にエンジュに教えを乞う。

### 03 仲間

7歳から13歳まで6年暮らして、初めてエンジュとちゃんと話した。  
エンジュはいいやつだった。  
国を盛り立てる仲間としてニニーの相談に乗ってくれた。  
たとえば、エンジュは3人で同じ作業をしながらキリとクコを監督している。  
水汲みも、ろ過も、蒸留も3人でやる。職人として一通り出来るように育てている。  
対してニニーは、ウツギに水汲み、布でこす、ろ過と力仕事を任せた。  
そしてイイギリに蒸留だけさせた。  
検品や在庫管理や進行の指示はニニーが引き受けた。  
なぜならウツギは繊細な蒸留作業が苦手な集中力がなかったからだ。  
ぼんやりして水が空になっても気づかない失敗を繰り返して分業することに決めた。  
「作業を細分化させて1つのことだけやらせる話はガールナルミスの工場と一緒だね。僕は悪くないと思うよ」  
穏やかなエンジュは何をいっても否定しない。

### 04 再試験

再試験の日、分業でうまくいくはずだった。  
重労働はウツギ、繊細な作業はイイギリが担当して、大量の蒸留水を作った。  
しかし、水を運んでいたウツギがよろめき、出来上がった蒸留水のビンを割ってしまう。  
このままでは間に合わない。  
どうする？  
ニニーはエンジュの元に駆けつけ、頭を下げた。  
「お願い、手伝って！」  
快くエンジュは引き受けてくれた。  
そして再試験に合格した。  
自分ができればよいと考えていたニニーは、協力する大切さを理解できたような気がした。

---

トッソリミス寓話「魔女と王さま」(後編2)

---

著 ELYE

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---